

生まれ故郷の住民を悩ます メガソーラー建設計画

(特非) シビルNPO連携プラットフォーム
アワードWG 委員
日刊建設通信新聞社 取締役副社長
和田 恵



国内最大級の私立総合病院として名高い亀田総合病院の、亀田信介院長の講演を聴きながら、生まれ故郷に降りかかっている難題が頭をよぎった。難題とはメガソーラーの建設計画。故郷はいま、計画を受け入れるか拒否するかで大揺れしているというのである。

故郷は九州南端。近くに百名山の一つ、薩摩富士をのぞみ、特攻航空基地跡、JR最南端の駅、九州で一番大きい湖などもある。周辺地域は、かつては新婚旅行のメッカで西日本有数の観光地だった。しかし、故郷の集落（行政区画では「区」）に限ると人口減少と高齢化が進み、いまや限界集落に転落する一歩手前。そして、人口約1000人の集落はいま、メガソーラー建設計画が区民を賛成派と反対派に二分し、揉めに揉めている。

事業主体は某大手総合商社。開発面積は40町歩というから、坪換算だと12万坪、メートル法では29万7520㎡となる。建設地は、集落の後背地となる山（標高411m）の中腹。この山頂からは、対岸の大隅半島や桜島、南方の東シナ海上に顔を出す屋久島といった大パノラマを見渡すことができ、眺望の良さはむろん、南面の日当りは申し分ない。ここに東京ドーム6.5個分に相当する面積の山林や畑を切り開いて、ソーラーパネルを敷設するというのである。

反対派の行動は水際立っている。計画は、いまだ開発申請はされていないようだが、許可権限のある県はもとより、地元の市にも中止要望書を提出済みという。区民集会では、賛成反対双方の代表者による公開討論会も開かれ、その結果を踏まえ賛成派の副区長が辞任した。

反対派の主張は開発地の下流域、いわゆる山裾に広がる複数区への、山林伐採に伴う豪雨時の土砂災害の懸念が払拭できないことに尽きる。しかし、反対派の多くも闇雲に拒否しているわけではない。詳細な計画の開示を求めても応じない事業者に感情的になっている面があるという。

区民の高齢者の多くは、戦後に木材需要増で木の伐採が進んだ結果、大雨の度に畑土の流出や住宅の床上浸水などに見舞われ、難儀した記憶を持つ。それを回避すべく集落あげて植林に励み、育て、下枝や雑木を払うなど山を守り、この半世紀は安寧を取り戻した。しかし年々、高齢化は進む一方で、後継者確保も難しくなっている。防災は大事だし、再生エネルギー推進の必要性も分かる。道路を通して地域が便利になるならと、土地の無償提供などに代々、協力してきた土地柄でもある。地域貢献につながるなら山を手放しても良い。なのに……というわけである。

亀田院長は講演で、地方が生き残るためにはメディカルツーリズムの受け入れ態勢強化や地価の安さなどを生かした住宅提供により、「都市の課題を解決する場所」として活路を見出す必要があると語り、実現に向けた構想を紹介した。わが生まれ在所に限らないだろうが、「偉大なる田舎」に必要なのは、持ち上がった課題に対し受動的に構えるだけでなく、普段から構想力や実行力を磨くことではないかと、講演を聴きながら考えていた。